

天空と銀河

～ 研究棟屋上照明のコンセプト

石井リーサ明理 いしい・リーサあかり

照明デザイナー・グラフィックデザイナー

光のデザインをするときは、いつも「雰囲気作り」を心がけています。光によって、同じ場所や建物でも華やかにもなれば、落ち着いた感じにもなり、祝祭的になれば、親しみやすい印象を与えることもできるからです。建築家によって考案された空間は、太陽の下で美しく見える完成予想図でプレゼンテーションされることがほとんどですが、その「夜の顔」をつくるのが、私たち照明デザイナーの仕事だと考えています。建築デザインの良さを更に引き出し、建物の機能に即し、使う人たちの利便性に応え、欲を言えば昼間にはない表情でちょっとしたサプライズができれば、いつも知恵を絞っているわけです。

今回のプロジェクトは、ユニークな形態を負った屋上のライトアップです。ただの「ビルの屋上＝休憩スペース」を遙かに逸脱した、学問の集合、研究者の集う「アカデミア」たるべくアンフィシアターが考案されていました。そこで開催されるはずの講演会を初めとする、様々なオペレーションがなされるための機能をまず満足させる照明であること。そして更に研究棟のシンボルでもある特徴ある屋上のパーゴラと、階段

客席空間を中心とする意匠を生かして、IPMUの研究理念をも象徴する照明デザインをすること、が自ずと目標となりました。

照明デザイン・コンセプト

IPMUの研究対象である宇宙に思いを馳せる場として、新棟の屋上照明をデザインするに当たっては、「天空」と「銀河」を象徴する光をモチーフに、下記のようなコンセプトを採用しました。

1. 夜空と環境に配慮した低位置照明配置：星空を眺めるための妨げにならず、周囲への光漏れを最低限に抑えるため、照明器具は壁に埋め込んだり低い高さに配置したりします。
2. 建築と一体となった明るさ感の創出：壁等建築の中に照明器具を埋め込むことにより、すっきりとした外観を確保します。更に、シアター階段には特別な華やかさを加えるため、斜めの壁面のみライトアップを施し、その反射光で間接的に空間を明るく

「星雲パターン」でライトアップ
された研究棟屋上の夜景。
照明デザイン・写真：
I.C.O.N. 石井リーサ明理



「オーロラパターン」でライトアップ
された研究棟屋上の夜景。
照明デザイン・写真：
I.C.O.N. 石井リーサ明理



します。人の表情を美しく見せる光源を採用して、快適な雰囲気をつります。

- アイキャッチとウェルカム感：柏の葉キャンパス駅方面からの見え方を配慮して、パーゴラにブルーを基調とした控えめなライトアップを行い、「天空」を表現します。また、シアター階段脇の植栽には、「銀河」を彷彿とさせるミニライトを点在させ、明るさと楽しさを演出し、ウェルカム感を創出します。
- 適光適所と、オペレーション・フレンドリー：階段や入口などには、足下や扉周りを明るくする照明

器具を配備し、機能性に配慮します。光源は省エネに配慮したLEDやコンパクト蛍光灯などを使用し、全ての照明は日没時に自動点灯し、定時に自動消灯させるタイマー制御を伴う、環境配慮型設計とします。

パーゴラの照明は現場での最終点灯実験を経て8つのプログラムが作られました。夕方のホワイトから夜が更けるにつれて次第にライトブルー～ブルー～ダークブルーに時間とともにゆっくりと変化していく「通

常パターン」に加えて、講演会用に爽やかなホワイトや華やかなターコイズブルーなどの「単色パターン」、さらには特別な催事に様々なニュアンスのブルーがランダムに色変化する「星雲プログラム」や、優しいパステルカラーが緩やかに継続変化する「オーロラ・パターン」が、プリセットされました。機構の多様なアクティビティーに合わせて、活用して頂けることを期待しています。

新研究棟を利用する方々に、研究の合間の夕暮れ

時に屋上の照明を眺めながら心安らぐ一時を過ごしたり、ライトアップを目にして宇宙に想いをはせたり、時には華やかな光の下でレセプションを楽しんだりして頂ければ本望です。

この場を借りて、IPMU副機講長・相原博昭先生をはじめとする先生方、スタッフの皆様、建築の大野秀敏先生、設計スタッフ、そして現場関係者の皆様に、心からお礼を申し上げます。

IPMU INSTITUTE FOR THE PHYSICS AND MATHEMATICS OF THE UNIVERSE

宇宙を眺めるIPMUの窓 ～新ロゴ・デザインのコンセプト

石井リーサ明理

「宇宙を研究する新しい機構のシンボルをデザインして欲しい」というご依頼を頂いたとき、私の頭の中には、宇宙を見渡すような壮大で神秘的で、しかも美しいイメージが次々と浮かびました。ある程度形のあるもの、まだ漠然とふわふわしたもの、遠いようで近いようなピントの合わせられないぼんやりしたもの、などいろいろでした。それはまるで、天体望遠鏡で、距離さえ測れない遠い星を探しているような感じでした。これらのイメージに触発されて、私は早速7候補を考案しました。

その中には、大地のグリーンと宇宙のブルーを組み合わせ、数物2分野の協力を象徴した案や、楕円を組み合わせる惑星の軌道や分子の様子を表した案、球の集合で文字を表現しエネルギーや分子をイメージした立体的な案、白黒のコントラストで暗黒エネルギー

をテーマにした案など、様々なシンボルが折り込まれていました。また視覚効果という面でも文字を変形させて躍動感を出したり、白抜きにして光を感じさせたり、色遣いで学問的発展を暗示させたりと、工夫を凝らしたのを覚えています。

その中から、副機講長の相原博昭先生を通じてIPMUのご意向を伺い、最終的にまとめられたのがこのロゴです。実は、先に提出したアイデアのうち、2つを合体させたバージョンです。宇宙の様子をIPMUの窓を通して見るというイメージを形にした案と、機構名をわかりやすく明記した上に、小さな円を多用して天体や速度を暗示した案が融合されています。更に、長方形に入りきらないダイナミックさを付加するために、最初の「アイ」の点は故意にフワとした軽さを思わせる形状にしてあります。結局、最初にインスピレーションを喚起された天体望遠鏡から星を見るというイメージが形になり、そのメッセージ性の強さが、お気に入って頂けたのではないかと考えています。

このような機会を与えてくださったこ

IPMUのロゴも
石井さんが
デザインしました。

とに感謝するとともに、新ロゴが新研究棟とともに貴機構のご発展に少しでも寄与すればと願う次第です。



著者の石井リーサ明理さんは、照明デザイナー・グラフィックデザイナーです。(株)I.C.O.N.代表 (<http://www.icon-lighting.com/>) としてパリと東京を拠点に世界各地で照明デザイン・プロジェクトに従事する傍ら、写真・絵画製作、講演、執筆活動も行っています。著書に、『光に魅せられた私の仕事～ノートル・ダム ライトアップ プロジェクト』（講談社、2004年11月）、『都市と光～照らされたパリ』（水曜社、2005年1月）があります。